

出版甲子園

本屋で見つける、あなたの名前。

出版というと、経験豊富な出版の人々にしかチャンスのないもののように、多くの人は思うことだろう。しかし、大学生である我々だからこそ語ることもできる「自分だけが知っている特別な法則」。誰も知らない特別な経験」といったのも、中にはきつとあるはずである。「出版甲子園」では、そういった学生たちの中に眠る可能性を引きだし、それを本という形で出版することを目的としている。

この企画は早稲田大学のサークル活動から始まったものである。当初から、早稲田大学には自分たちが書いた原稿で商業出版を目指す「PICASO」という団体がある。そのメンバーが自分たちの出版に関する経験を他の人々にも知ってもらいたい、全国の学生から企画を募集する「出版甲子園」という団体を立ち上げたのである。現在は早稲田大学のみならず、東京大学や

出版という、経験豊富な出版の人々にしかチャンスのないもののように、多くの人は思うことだろう。しかし、大学生である我々だからこそ語ることもできる「自分だけが知っている特別な法則」。誰も知らない特別な経験」といったのも、中にはきつとあるはずである。「出版甲子園」では、そういった学生たちの中に眠る可能性を引きだし、それを本という形で出版することを目的としている。

この企画は早稲田大学のサークル活動から始まったものである。当初から、早稲田大学には自分たちが書いた原稿で商業出版を目指す「PICASO」という団体がある。そのメンバーが自分たちの出版に関する経験を他の人々にも知ってもらいたい、全国の学生から企画を募集する「出版甲子園」という団体を立ち上げたのである。現在は早稲田大学のみならず、東京大学や

東京学生映画祭



▲今年の出版甲子園のパンフレット

HP: <http://spk.picaso.jp/>

5月中旬、毎年東京で学生が企画運営する学生による学生のための映画祭が行われている。その映画祭は東京学生映画祭といわれ、東京近郊の大学に所属する映像制作団体から作品を募集し、グランプリ作品を決定・表彰する、関東では最大規模の学生映画祭である。過去に出品した映像製作団体の監督には、現在映画界で活躍している監督もいるそうだ。この映画祭の大きな特徴は企画運営を学生のみで行っていることだろう。様々な大学の有志から構成される東京学生映画祭企画委員会の主な活動場所は、たくさんのお店が立ち並び活気溢れる若者の町、下北沢。そんな町の一角で映画や映画祭当日の予行演習等を行っている東京学生映画祭企画委員会の方にお話を伺った。



▲昨年のコンペティションの様子

HP: <http://www.tougakusai.jp>

Q. なぜ東京学生映画祭を開催することになったのですか。

A. 当初は映画を作っても公開する場は多くありませんでした。しかし、もつと色んな人に観てもらいたいという思いで26年前に早稲田大学から映画祭が始まったのです。

Q. 東京学生映画祭企画委員会とはどのような規模なのですか。

A. 東京学生映画祭企画委員会にはどの様な部署があるのですか。

A. 企画委員会は進行部、宣伝部、上映部の3つに分かれています。進行部は映画祭の様々な企画を基本に、全体をまとめる映画祭の核となっています。宣伝部はマスコミとの交渉やパンフレットやフライヤー、機関紙の発行等、映画祭の宣伝に関わる仕事を行っています。他にも、参加団体への取材、HPの作成、メール対応など、外部や参加団体、観客とのパイプ役を果たしています。最後に、上映部は映画祭当日の上映、作品管理をしており、予選スケジュールやオープニング映像を担当しています。

Q. 東京学生映画祭には賞がありますか。

A. グランプリと準グランプリ、観客賞が作品に与えられる賞としてあります。賞金と賞状もありますが、やはり映画なので多くの人が見られることが一番の得るものですね。賞を取った作品は都内の劇場でグランプリ上映会を行い、さらに多くの人に観てもらえる機会が増えます。

Q. 東京学生映画祭にはどのような部門があるのですか。

A. 実写部門とアニメーション部門があります。アニメーション部門は3年前から実施しており、TVで見られるような長編のアニメではなく、10分程度の短編アニメーションの募集が多いですね。話の面白さより絵の動きや芸術性に重点を置いて審査しています。実写部門は映画祭発足当時からあり、プロの方と比べても遜色のない映画が毎年映画祭で上映されます。

Q. 東京学生映画祭企画委員会の一年間の流れを教えてください。

A. まず、作品を集めることから始まります。毎年5月後半に映画祭があるので、その前の年の10月から募集をかけます。そこでおおよそ150作品ほど集まりますが、その作品を全て映画祭で上映する訳にもいかないので、予選会を実施します。予選会は1次から3次まであり、1次予選は委員会側で審査します。委員会側は映画の製作に詳しい人があまりいないので、2次予選は出品してくださった学生の方々に、作り手側の目線から審査してもらいます。最終的に3次予選では、もう一度委員会側が20作品程度に絞られた作品を8作品に絞ります。その8作品が本選で映画祭当日に上映されます。本選ではゲスト審査員を迎えて受賞作品を決めてもらいます。ゲスト審査員には、監督やプロデューサーの方、年によつては俳優の方にお願いして審査してもらいます。去年は『踊る大捜査線』シリーズの脚本の君塚良一監督でした。

Q. 送られてくる映画のジャンルにはどのようなものがありますか。

A. 様々ですが、やはり学生なので人間ドラマや若者から見た社会といった、学生目線の作品が多いかもしれませんね。

Q. 東京学生映画祭は学生にとってどのようなものですか。

A. 東京学生映画祭のグランプリ作品は日本学生映画祭で上映されます。日本学生映画祭というのは、TOHOSHINKAが運営している学生映画祭と京都で行われる京都国際学生映画祭のそれぞれのグランプリ作品が、一挙に上映される一番大きな学生映画祭です。日本学生映画祭や先ほど話した都内の他の劇場で上映されることにより、監督の名前が話題になって一般の映画祭に出品が決まることがあります。つまり、東京学生映画祭が日本の映画界で活躍するひとつのきっかけとなっているのです。

Q. 過去の応募者にはどういった方がいるのですか。

A. 応募してくれた方の中には「ゴールデンランバー」等で知られる中村義洋監督や「EUREKA」等で知られる青山真治監督ら、多くの日本映画界の巨匠がいますね。

Q. 最後に新聞を読んだ人に伝えたいことはありますか。

A. 今では昔ほど機材が高くないので映画を作るのも比較的気軽に出来るようになりました。誰でも簡単に映画を撮ることが出来る時代です。少しでも興味がある人や、映画が好きで作りたいたいと思っている人は積極的に一度作ってみてください。また、学生映画はクオリティが低いと思われがちですが、実際に観てみたらプロの方と比べても遜色がないので、映画祭に足を運んでみて欲しいです。企画委員も募集しているので、興味がありましたらホームページをご覧ください。